

論文審査結果要旨

論文題目 中国語“X 給 Y VP”構文の意味ネットワークの形成についての認知言語学的研究
論文提出者氏名 林立梅

本論文は認知言語学の観点から“給”によって構成されるいくつかの構文の異なる文法的な意味を考察し、その複数の意味ネットワークの形成及び関連を明らかにしようとするものである。論文はそれぞれの構文のもつ中心的な意味と時代の変遷に伴う意味の拡張を考察するため、ほぼ300万字にのぼる三つの時代の文学作品（それぞれ、18世紀の小説《紅樓夢》、19世紀の小説《兒女英雄伝》、20世紀の現代小説）から構成されるコーパスデータを調査し、分析を行った。

論文は7章から構成され、序論では従来の“給”による構文の説明とその問題点を提起すると同時に、研究目的や研究方法並びにデータの抽出方法について説明した。第2章から第6章にかけてはコーパスより抽出した用例と用法の分析を踏まえた上で、“給”によるいくつかの構文の文法的意味を大きく以下の二つの中心的スキーマにまとめた。一つはX（動作主）によるY（受け手）へのモノの移動スキーマであり、いま一つは参照点構造スキーマである。モノの移動スキーマには更にVP（述語）によるプロフィールのし方に応じて「事物の転送・付加」、「情報の伝達・提供」を中心とする移動段階プロフィール、「事物の製取得・用意」を中心とする準備段階プロフィール、移動物の使い道を具体的に示す利用段階プロフィールの三つの下位スキーマに分けられる。これら三つの下位スキーマは、「モノの移動」事象連鎖を構成しており、準備段階が移動段階を目的とし、移動段階が利用段階を目的とするという関係にあると指摘した。

一方、〈参照点構造〉スキーマは、Xの動作対象がY（を参照点として喚起される）の支配域に同定される事態を反映し、これは従来「受益者」や「被害者」と言われてきた「間接関与者」を導く“給”の文法的意味をも含めた意味構造をも示すものである。そしてこの二つの中心的なスキーマは互いに関連性があり、前者〈モノの移動スキーマ〉は〈経路焦点〉をプロフィールし、後者〈参照点構造スキーマ〉は〈終端焦点〉をプロフィールし、両者は意味的に連続性を持つと指摘した。そして、それぞれの構文の意味拡張についても触れ、モノの移動スキーマはXによる意図的な行為から非意図的な行為への拡張プロセスが観察され、参照点構造スキーマではYとXの動作対象が同一化するということが観察されたことを明らかにした。最終章の第7章ではそれまでの観察

と分析のまとめとして、それぞれの構文の意味構造とその関連性を図式で示した。

本論文の最大の特徴は実際のコーパスを用いて、三つの時代にわたる実例の用法を詳細に調べ、認知言語学の枠組みを使って実例に基づいた意味の分類と説明を行い、統一的に説明しようとするところにあるといえることができる。その結果、従来の研究では見落とされがちな用法や時代による意味の変化及び構文間の意味的関連を有機的に捉えることができた。

しかし、論文に不備や問題がなかったわけではない。審査員から理論的な枠組みを十分に生かしていないところがあり、用語の使用により慎重を期すべきであり、また用例の分類基準は意味に基づいているため、曖昧な部分があり、論証をより厳密に行うべきであるという指摘があった。しかし、これらの問題は本論文の学術的価値を損ねるものではない。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。